様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １６ 日現在

機関番号：３４３１２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2022
課題番号：１７Ｋ０４３８３

研究課題名（和文）擬態語による性格記述に関する理論的総括および発展的検討

研究課題名（英文）Theoretical elaboration and empirical investigation of personality description using gitaigo

研究代表者
向山　泰代（MUKOYAMA, Yasuyo）

京都ノートルダム女子大学・現代人間学部・教授

研究者番号：８０３１９４７５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：擬態語性格尺度（小松ら，2012）や擬態語性格尺度短縮版（酒井ら，2015）を用いた調査や女子大学生を対象とした半構造化面接の記録をもとに，性格を記述する擬態語に関する量的研究と質的研究を実施した。インタビュー資料の分析を通じて，擬態語性格尺度を構成する6つの下位尺度のうち，「緩やかさ」「淡白さ」「軽薄さ」「几帳面さ」下位尺度の意味内容を抽出した。また，「緩やかさ」に焦点を当て，「緩やか」な行動を例示する仮想エピソードを用いた質問紙調査を実施した。結果，他者の行動を「緩やか」と認知することは，観察者に興味や驚きの感情を喚起させ，同時にその他者と積極的に関わる指向が生じること等が示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
臆病さ・緩やかさ・淡白さ・几帳面さ・不機嫌さ・軽薄さの6下位尺度からなる擬態語性格尺度やその短縮版による調査データと，女子大学生への面接記録を分析し，量的・質的の両面から，擬態語性格特性の意味内容や性格認知の過程について検討した。特に「緩やかさ」「淡白さ」「軽薄さ」は独自性のある特性と考えられることから，これらに焦点を当てて他性格概念との関連や特性の意味内容の抽出を試みた。本研究を含む一連の研究は，性格心理学分野で擬態語に着目した唯一の研究であり，日本語に多く，かつ日常的に使われている擬態語から，日本文化や社会の特徴を反映した性格認知やコミュニケーションの在り方に迫る試みである。

研究成果の概要（英文）：　In order to examine the characteristics of personality traits described by gitaigo (mimetic words in the Japanese language), we conducted quantitative and qualitative studies using “Gitaigo Personality Scale (Komatsu et al., 2012)”, “Short Form of the Gitaigo Personality Scale (Sakai et al., 2015)”, and semi-structured interviews.
From semi-structured interview to female undergraduate students, we described the essential characteristics of four personality traits, "Mildness," "Candidness," "Frivolousness," and "Preciseness" that are from six sub-scales of Gitaigo Personality Scale. We also carried out a questionnaire survey using fictitious episodes that exemplify the Mildness of our behavior. We found that recognizing the Mildness of others raises the feeling of interest and surprise, with an orientation to interact with the person who showed the “Mild” behavior.

研究分野：教育心理学・パーソナリティ心理学

キーワード：パーソナリティ　擬態語　尺度　personality　gitaigo　mimetic words　personality measures

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

(1)全体構想

本研究は，性格を記述する擬態語（例：さっぱりした人，ほんわかした人）に着目し，その意味や理解の過程を明らかにし，擬態語という観点から日本における性格認知とコミュニケーションの特徴について理論的総括を行うことを目指した。具体的には，1)擬態語性格尺度（小松ら，2012）の 6 つの擬態語群，特にビッグファイブとの関連が相対的に低い 3 つの擬態語群「緩やかさ」「淡白さ」「軽薄さ」の意味を他概念との関連から明確化する。2)性格という概念が顕わになる日常の行動事例を収集し，性格認知の手がかりや認知過程を明らかにする。3)異なる文化的背景を持つ対象の，擬態語による性格記述の理解度や理解過程を調べ，性格認知に影響する要因を検討する。以上をもとに，文化的観点を含め，擬態語による性格認知とコミュニケーションの特徴について理論的総括を行う。

(2)先行研究の状況

日本語には他言語に比べ擬態語が多いとされるが，日常生活における擬態語の使用や機能についての心理学的研究は十分ではない。性格心理学の分野でも，擬態語に着目した研究はこれまで見られなかった。擬態語は，視覚や触覚の感性を通して自己の身体図式や自己意識に根ざし，高いイメージ喚起力を持つとされており，擬態語のイメージ喚起力の高さは，脳画像等を利用した実験をはじめ，幾つかの実験で示唆されている（苧阪ら，1999; Osaka et al., 2003; 2004 など）。筆者らは，日本における性格の語彙研究の成果をもとに，性格を表す擬態語に着目し，長期にわたって同じメンバーで研究を継続してきた。

日常生活では，擬態語によって性格を記述することは頻繁に行われている。擬態語による表現は感覚的で分かりやすく，聞き手に生き生きとした人物イメージを喚起させる（例えば，内田，2005）。一方，擬態語による表現に関して，その意味内容を具体的・分析的に説明することは難しい。言語は，我々の原初的な認識をより高次の認識へと変化させる作用を持つとされる（Valsiner, 2001）が，感覚や知覚に根ざした認識を表現した擬態語による記述は，曖昧なものを明確化するという言語の機能を検討するための格好の素材でありながら，日常的（通俗的・素人的）なものとして，これまで学術的な研究の対象としての有効性が見過ごされてきたと考えられる。また，性格の語彙研究が欧米を中心に発展し，欧米では自国の言語に含まれる擬態語の数が少ないことが，この研究領域において擬態語が注目を集めなかった一因とも考えられる。日常語を通じて性格を理解しようとする語彙研究は，その語彙が流通し，使用されている文化や社会の特徴を反映するものとなる。日本語に多く含まれる擬態語に着目し，その意味内容や理解の過程を知ることは，日本文化や社会の特徴を反映した性格認知の在り方やコミュニケーションの特徴を明確化することに繋がると考える。

筆者らは，科学研究費（平成 18 年～平成 20 年 萌芽研究 18653070，平成 23 年～平成 24 年 挑戦的萌芽研究 23653194）を得て研究を継続し，2012 年に「擬態語性格尺度」の標準化に至った（小松ら，2012）。擬態語性格尺度は，性格表現語のデータベース（辻，2001）から抽出した擬態語リストをもとに作成された。「臆病さ（例：おどおど・もじもじ）」「緩やかさ（例：のほほん・ほんわか）」「几帳面さ（例：きっちり・しっかり）」「不機嫌さ（例：ぴりぴり・かりかり）」「淡白さ（例：あっさり・さばさば）」「軽薄さ（例：ちゃらちゃら・でれでれ）」の 6 語群（計 60 語）から成り，一定の信頼性と妥当性を備え，自他の性格評定に使用できる。

この擬態語性格尺度を用い，例えば，①性格の自己評定と他者評定の差や性差の検討（小松ら，2012），②5 因子性格検査（小松ら，2012; Mukoyama, et al., 2016）や価値志向性尺度（酒井ら，2015）との関連，③親しい友人ペア間でのリーダー／フォロワー認知と性格評定との関連（小松ら，2016），④擬態語性格尺度短縮版の標準化（酒井ら，2015），⑤性格記述の地域差の検討（酒井ら，2009）等の研究を進めてきた。これら一連の研究において，擬態語性格尺度を構成する 6 つの擬態語群のうち，「緩やかさ」「軽薄さ」「淡白さ」語群は，従来性格を網羅的に把握するとされてきたビッグファイブの諸特性と関連が相対的に弱く，独自の性格の側面を記述することが示唆された（西岡ら，2006; 小松ら，2012）。また，擬態語性格尺度と価値志向性尺度（酒井ら，1998）との相関からは，「臆病さ」「緩やかさ」「淡白さ」語群は，価値志向性尺度との関連が相対的に弱いことが示された（酒井ら，2015）。その他，先述③の友人ペア間でのリーダー／フォロワー認知と性格評定との関連（小松ら，2016）では，友人間で“友人がリード”と認知した者は自身の性格を「臆病」「緩やか」，友人の性格を「几帳面」「淡白」と評価し，“自分がリード”と認知した者は，友人の性格を「緩やか」と評価していた。すなわち，友人関係上のリーダー／フォロワー役割と特定の性格認知との結びつきが示された。なお，この研究の一環として面接調査に参加した研究協力者の発言内容の事例的分析からも，リーダー／フォロワー役割と性格認知との関連を示す結果を得ている（向山ら，2014）。

以上の結果をまとめると，従来の特性語による記述に加え擬態語で記述することによって，より明確になる性格の側面があること，特に「緩やかさ」「淡白さ」語群で記述される性格は，他者との関係において“志向しない”“主張しない”“執着しない”等という在り方を積極的に意味

付けて捉え，対人関係の中で一定のポジティブな評価や価値を保持している可能性があり（Komatsu，et al.，2016），擬態語という観点から日本における性格認知とコミュニケーションの特徴を検討する，という本研究の目的に達するための一つの重要な視点となると思われる。

２．研究の目的

本研究では，以上の問題意識とこれまでの研究成果を踏まえ，既存データの再分析や理論面での補完を行いつつ，新たに資料収集や分析を加え，擬態語という観点から日本における性格認知とコミュニケーションの特徴について理論的な総括を目指す。具体的な方策を以下に記す。

(1)先の研究で用いた 5 因子性格検査や価値志向性尺度とは別の心理検査や尺度を用い，他の性格概念との関連から，擬態語性格尺度で測定される 6 つの擬態語群，特にビッグファイブと関連の低い「緩やかさ」「軽薄さ」「淡白さ」の擬態語群の意味をより明確化することを目指す。
(2)親しい友人ペア間の性格認知研究の一環として実施されたインタビュー資料（既存資料）から，擬態語による性格記述と結びついた具体的な行動事例を抽出して再分析するとともに，新たに性格概念が顕わになる日常場面の行動事例を収集し，日常的な文脈における性格認知の手がかりや認知過程を明らかにする。
(3)擬態語による性格記述について知識量や文化的背景の異なる個人や集団（例えば，留学生）を対象として，擬態語による性格記述の理解度や理解過程を調べ，性格認知に影響する要因を検討する。

以上(1)～(3)の結果をまとめ，日本の文化や社会の特徴を反映した性格認知の在り方やコミュニケーションの特徴を明確化する。

３．研究の方法

(1) 擬態語性格尺度と他尺度との関連からみた 6 つの擬態語群の意味の検討：擬態語性格尺度と他尺度を用いた質問紙調査
①擬態語性格尺度と他尺度との関連

ビッグファイブ以外の性格理論や性格概念との関連から 6 つの擬態語特性の意味内容を明らかにするため，大学生を対象に擬態語性格尺度とエゴグラム（新版 TEG-Ⅱ）を併せて実施し，各項目への自身の当てはまりの程度について回答を求める。収集した 306 名のデータから，新版 TEG-Ⅱの妥当性尺度の判定基準や回答時の行動をもとに 19 名を除外し，287 名（男性 96 名，女性 180 名，性別不明 11 名）の回答を分析対象とする。

(2)擬態語による性格記述の事例的検討：インタビュー資料の再分析および仮想エピソードを用いた質問紙調査
①インタビュー資料の再分析

擬態語による性格記述と結びついた具体的行動をインタビュー資料から事例的に検討し，6 つの擬態語群の意味内容を抽出するため，小松ら（2016）での調査参加者のうち，女子 33 名へのインタビュー調査資料を再分析する。特に，ビッグファイブと関連の低い 3 つの擬態語群（緩やかさ，淡白さ，軽薄さ）の意味内容の明確化を目指す。なお，再分析に用いるインタビュー資料は，次のような手続きで収集されたものである。

擬態語による自他評定の質問紙調査を実施した際，調査協力者の自己評定・調査協力者による友人評定・友人による自己評定の 3 種の回答が有効だった調査協力者 215 名中，インタビュー調査への参加協力が得られた女子 33 名に，2011 年 6 月～2012 年 2 月にかけて半構造化面接を実施した。インタビューでは，上記の擬態語性格尺度による友人の性格評定結果から，評定が高い 2 語（2 項目）を選定し，その語に当てはまる友人の具体的な行動や特徴的なエピソード，それに対する調査協力者の考え等を尋ねた。録音したインタビュー内容は書き起こし，文章化した。
②擬態語で測定される性格特性を例示する仮想エピソードの構成および質問紙調査

上記①で得られた 3 つの擬態語群（緩やかさ，淡白さ，軽薄さ）の意味内容をもとに仮想エピソードを複数作成し，質問紙調査を実施する。具体的には，3 つの擬態語特性の意味内容を例示するような 9 つの仮想エピソードを構成し（3 エピソード×3 擬態語特性），エピソードとの対応が想定される擬態語性格特性（擬態語性格尺度短縮版の下位尺度 5 項目）への当てはまりの程度を評定する質問紙を作成する。質問紙には，エピソードの人物の実在感を評定する項目（同じような状況で同様の行動を示す友人・知人がいるか，「いる」「いるかもしれない」「まったくいない」の 3 段階評定）も含める。この仮想エピソード質問紙を用いた調査の目的は，3 つの擬態語特性を最もよく表現する典型的エピソードを見出し，後続の研究（下記③）の素材とすること，及び上記①のインタビュー資料の分析結果の妥当性を確認すること，である。大学生 80 名（男性 17，女性 59，不明 4）の回答を分析対象とする。
③「緩やかさ」の擬態語特性を示す仮想エピソードの評価

大学生を対象に，上記②の質問紙調査で使用した 9 つの仮想エピソードのうち，「緩やかさ」の擬態語特性に絞って質問紙調査を行う。質問紙には「緩やかさ」特性を例示することが確認された 3 つの仮想エピソードを提示し，エピソードに示された行動が情報の受け手である観察者（調査協力者）にどのような対人感情，性格認知，印象（付き合いやすさ・望ましさ）を生起さ

せるのか等を検討する。研究への協力が得られた大学生 231 名（男性 87 名，女性 135 名，無回答 9 名）の回答を分析対象とする。

(3) 知識量や文化的背景の異なる集団や個人を対象とする擬態語による性格記述の検討：言語や文化、居住地域等を拡張した調査

①擬態語による性格記述についての文化心理学的検討

日本語とドイツ語のバイリンガルである翻訳者に依頼し，擬態語性格尺度をドイツ語に翻訳する試みを通じて，擬態語による性格表現の特徴を明らかにする。また，研究協力が得られた留学生 1 名を対象として，擬態語による性格記述に関する理解度やコミュニケーション上で困難を感じる部分等についてインタビュー調査を行う。

②擬態語性格尺度短縮版を用いた全国規模の調査

主として関西圏の大学生を対象として実施してきた先行研究での成果を踏まえ，青年期～高齢期までの幅広い年齢層を対象とした擬態語性格尺度短縮版（酒井ら，2015）を用いた，自他の性格認知に関する全国規模の調査を実施する。この大規模調査で得たデータをもとに，擬態語による性格認知に関する知見の拡充すること，及び対象に関する直接情報が少ない事態（本研究では著名な芸能人 2 名を取り上げた）における性格理解とその関連要因を検討することを目的とする。直接交流のない他者について，限られた情報をもとに性格を推測し判断する事態に関連する要因として，年齢や性格等の属性に加え，対人志向性やリーダーシップ，他者の性格理解に関する効力感や他者への関心，対象人物に関する情報量や好感度等を取り上げる。調査はインターネット調査会社に依頼し，4 つの年齢層（①18～24 歳，②25～44 歳，③45～64 歳，④65～84 歳）の協力者が，各年齢層について男女各 150 名程度となるようサンプリングした。結果，男性 684 名（①166 名，②178 名，③169 名，④171 名），女性 724 名（①167 名，②183 名，③198 名，④176 名）のデータが収集された。

４．研究成果

(1) 擬態語性格尺度と他尺度との関連からみた 6 つの擬態語群の意味の検討：擬態語性格尺度と他尺度を用いた質問紙調査擬

①擬態語性格尺度と他尺度との関連

擬態語性格尺度と新版 TEG-Ⅱ（以下，TEG とする）の下位尺度間の相関を求めた結果，擬態語性格尺度の 6 つの下位尺度のうち 4 つ（臆病さ・几帳面さ・不機嫌さ・軽薄さ）については，TEG の下位尺度（CP，NP，A,FC，AC）と絶対値.35 を超える相関が見られた。最も値が高かったのは，臆病さは AC（順応した子ども）と r=.51，几帳面さは CP（批判的親）と r=.44，不機嫌さは NP（養育的親）と r=-.35，軽薄さは FC（自由な子ども）と r=.40 であり，これら 4 つの擬態語群はエゴグラムによる“親”“大人”“子ども”の自我状態にもとづく解釈が一定程度，可能であった。残る 2 つの下位尺度（緩やかさ・淡白さ）は TEG の下位尺度との相関は相対的に低く，自我状態による構造モデルやエゴグラムで表現されるパーソナリティの各部分同士の関係，心的エネルギーの多少といった説明には当てはまりにくい特性と考えられた（向山ら，2019）。

(2) 擬態語による性格記述の事例的検討：インタビュー資料の再分析および仮想エピソードを用いた質問紙調査

①インタビュー資料の再分析

意味内容の抽出は，書き起こしたインタビュー資料から，選出された擬態語に該当すると思われる友人の具体的なエピソードや行動についての語り，及び調査協力者の反応や感情，印象に関する語りを抽出し，筆者ら 4 名の合議を経て，意味内容が共通すると思われる点を中心にまとめた。まず，6 つの擬態語群のうち，ビッグファイブとの関連が相対的に低い「緩やかさ」「淡白さ」「軽薄さ」の擬態語群の意味内容を抽出した（小松ら，2017；向山ら，2017；西岡ら，2018）。

友人の「緩やかさ」について語った者は 15 名で，擬態語性格尺度による友人の性格評定結果から，評定が高い項目として選出された語は，ほんわか・おっとり・のほほん等の 10 語であった。友人の「淡白さ」について取り上げたのは 11 名で，選出された語は，けろり・あっさり・さばさば等の 8 語であった。友人の「軽薄さ」については 12 名が取り上げ，にこにこ・きゃあきゃあ言う・うきうき等の 8 語が選出された。続いて，「几帳面さ」語群についても同様の手続きで意味内容を抽出した（西岡ら，2021）。友人の「几帳面さ」について語ったのは 16 名であり，選出された語は，きちんとする・ちゃんとした・しっかり等の 7 語であった。以上の性格を記述する擬態語から想起された具体的な行動や感情，印象等についての事例的検討を通じて，擬態語性格尺度で測定される 4 つの擬態語特性の意味内容が整理できた（Table 1）。

②擬態語で測定される性格特性を例示する仮想エピソードの構成および質問紙調査

インタビュー資料の事例的検討により得られた「緩やかさ」「淡白さ」「軽薄さ」の擬態語特性の意味内容を踏まえ，各特性の本質の少なくとも一部を例示すると考えられる 9 つの仮想エピソード（3 エピソード×3 特性）を作成した。「緩やかさ」の例を Table 2 に示す。9 つのエピソードの人物（Table 2 では友人 I）に対する「緩やかさ」「淡白さ」「軽薄さ」の下位尺度（各 5 項目，5 件法）の評定平均のレンジは 3.61～2.22 となり，人物の実在感については 8 つのエピソードで「いる」回答が 40%を超え，「まったくいない」回答は最多でも 15%と低い割合となっ

た。また，下位尺度の評定平均が高いエピソードでは実在感の評定も高かった。これらの結果から，エピソードの多くが擬態語性格尺度で測定される特性を一定程度例示・反映しており，実在感をもって提示できると考えられる。また，上記①のインタビュー資料の分析から得られた 3 つの擬態語特性の意味内容の妥当性を，ある程度裏付ける結果となった（小松ら，2019）。

Table 1 インタビュー資料の事例的検討にもとづく 4 つの擬態語特性の意味内容

緩やかさ	淡白さ	軽薄さ	几帳面さ
行動のペース・テンポの緩慢さ	ネガティブ感情からの転換	ポジティブ感情の表出・誘出	基準に沿った行為と目標達成
対人面での受容性・控えめさ・優しさ	関心の継続性の弱さ	反応・表出の過剰さ・強さ	表出されない思考の深さ
注意の散漫さ・抜け	他者との距離	協力者の理解からのズレ	自己との対比と評価の多様性

Table 2 「緩やかさ」の特性を例示する仮想エピソード例

あなたの大学では，学期ごとに，決められた日に確認手続きをしないと，その学期の履修ができない仕組みになりました。あなたの友人の I さんは，前の学期に手続日を忘れていて，友人から連絡をもらい，その日ぎりぎりの時間に手続きをしたと聞きました。この学期は明日が手続日なので，大学で I さんに会ったあなたは，「明日の手続きだいじょうぶ？」と聞いてみたところ，I さんは手続きにまったく気づいていない様子で「えー？ 明日って何かあるんだっけ？」と答えました。

③「緩やかさ」の擬態語特性を示す仮想エピソードの評価

仮想エピソードの人物の行動に対して，怒り・悲しさ・恐れ等の 11 の感情を感じる程度（4 件法），擬態語性格尺度短縮版の 5 項目による「緩やかさ」特性の評定（5 件法），人物に対する印象（付き合いやすさ・望ましさ）の評定（5 件法）の回答を分析した。結果，3 種のエピソードに示された「緩やか」な行動に対し，驚きの評定値が最も高かった。一方で，エピソードごとの違いも見られ,興味や羨ましさの感情評定が高いエピソードでは，人物に対する付き合いやすさや望ましさも高く評定されており，怒り・嫌悪・軽蔑・恐れの感情評定が高いエピソードでは，人物の付き合いやすさや望ましさの値は低かった。すなわち，擬態語性格尺度の「緩やかさ」が測定すると考えられる「行動のペース・テンポの緩慢さ」「対人面での受容性・控え目・優しさ」「注意の散漫さ・抜け」（Table 1）は，総じて観察者に驚きを生じさせる。そして，それが泰然自若とした行動として興味や羨ましさの感情や肯定的印象を生じさせることもあれば，約束や規則からの逸脱に繋がる行動として軽蔑や嫌悪感情や否定的印象を生む場合もあると考えられる。さらに「緩やかさ」の評定（項目及び合算値）と感情評定や印象（付き合いやすさ・望ましさ）評定との相関を検討した結果,「緩やかさ」の認知，特に「ほんわか」「ふんわり」が高いことは，その行動に興味や驚きといった感情や望ましさを感じること，また，その人物を付き合いやすいと感じることと関連していた。つまり，他者の行動を「緩やか」と認知することは，その他者と積極的にかかわる志向性と共起することが示された（向山ら，2022；小松ら，2022）。

(3) 知識量や文化的背景の異なる集団や個人を対象とする擬態語による性格記述の検討：言語や文化、居住地域等を拡張した調査

①擬態語による性格表現についての文化心理学的検討

擬態語性格尺度のドイツ語への翻訳を試みた結果, 例えば「おっとり」→“ gelassen und ruhig ”等，１つの擬態語に複数のドイツ語をあてる必要があり，しかもそれら複数のドイツ語が一貫した１つのイメージにまとまりにくく，擬態語の多義性が改めて浮き彫りとなった。

留学生１名（中国出身，渡日して約 7 年，日本の大学を卒業し大学院修士課程に在籍中）に擬態語性格尺度に含まれる語を提示しつつ，性格を表現する語として意味が分かるか，性格を表す語として使うか等についてインタビューを実施した。「几帳面さ」特性に含まれる語（例：きっちり，ちゃんとした）は，日本語試験や日本語学校の教員等の発言を通じて馴染みがあり，意味の理解や使用の文脈もほぼ的確であった。「几帳面さ」以外の 5 つの特性に含まれる擬態語については，学習機会は動画等に限られ，性格を表す語としての使用はほぼ無く，日常での使用のニーズも低く，意味理解も日本語を母語とする者とは異なる部分がみられた。これより，日本語が母語でない場合，日本語での会話が流暢で文章理解に支障がなくても，性格記述語としての擬態語の使用や理解はかなり限定的であることが示唆された。

②擬態語性格尺度短縮版を用いた全国規模の調査

収集した 1408 名のデータについて分析を進めており，「擬態語性格尺度の自己評定における青年期以降の発達的変化」「擬態語性格尺度による著名人の性格評定」の題目で，令和 5 年の学会発表を予定している。

以上，性格を記述する擬態語についての質的研究と量的研究を通じて，日本における性格認知やコミュニケーションの特徴についての知見が蓄積できた。今後，学会発表と並行して論文化の作業を進め，本研究の成果を国内外に公表していく。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計6件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 西岡美和・小松孝至・向山泰代・酒井恵子
２．発表標題 「擬態語性格尺度」は何を測っているか（４）「几帳面さ」尺度に関する事例的検討
３．学会等名 日本心理学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 小松孝至・西岡美和・向山泰代・酒井恵子
２．発表標題 擬態語で測定される性格特性を例示するエピソード構成の試み
３．学会等名 日本心理学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 向山泰代・西岡美和・小松孝至・酒井恵子
２．発表標題 擬態語による性格認知とエゴグラムとの関連
３．学会等名 日本教育心理学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 西岡美和・小松孝至・向山泰代・酒井恵子
２．発表標題 「擬態語性格尺度」は何を測っているか（３）「軽薄さ」尺度に関する事例的検討
３．学会等名 日本心理学会第82回大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 小松孝至・向山泰代・西岡美和・酒井恵子
２．発表標題 「擬態語性格尺度」は何を測っているか（１）「淡白さ」尺度に関する事例的検討
３．学会等名 日本心理学会第81回大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 向山泰代・小松孝至・酒井恵子・西岡美和
２．発表標題 「擬態語性格尺度」は何を測っているか（２）「緩やかさ」尺度に関する事例的検討
３．学会等名 日本心理学会第81回大会
４．発表年 2017年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	酒井　恵子 (SAKAI Keiko) (50306370)	大阪工業大学・教職教室・教授 (34406)	
研究分担者	小松　孝至 (KOMATSU Koji) (60324886)	大阪教育大学・教育学部・准教授 (14403)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関